子どもから何も言わないときは、ちょっと聴いてみよう

子どもが何か言いたそうにしています。でもなかなか言葉が出ないときには、親のほうから聞いてみましょう。きっかけをつかめなくて、子どもは一歩目を踏み出せないでいるのかもしれません。言いやすい環境を作ってあげましょう。

九歳くらいになると、それまでと違って「こんなこと言ったら恥ずかしいかな」「お母さんはどんなふうに思うかな」「何でそんなこと言うの？」と言われるかもしれない」など、お母さんが考えてしまうことを先読みするようになります。しかも、マイナスイメージで考えるようになります。

低学年のときのように、何でもストレートに話すことに対して臆病になってきます。ですから、子どものほうから話すことが難しくなってくるのです。

よく、「うちの子は何も言わないのです。おとなしくて、このままでいいのでしょうか」と言われるお母さんがいらっしゃいます。そんなときに私はこう言います。

「お子さんは、おとなしいから本当に何も言うことがないのでしょうか。もしかしたら、お母さんに聴いてほしいことがいっぱいあるのかもしれませんよ。でも、なかなか言い出すきっかけがつかめずに、悩んでいるのではないのでしょうか。お母さんから、『学校はどう？』『何かおもしろいことある？』など、聞いてみてはいかがでしょうか。子どもが話しやすくなるきっかけを作るのも、お母さんの役目ですよ」

「聴いてほしいけれど、なかなか言えない」というもどかしさを持つところも、この年齢の子どもの特徴です。

そんな子どもの思いを引き出してあげるのは、お母さんです。子どもはお母さんには何でも伝えたいのです。知ってほしいのです。しかし、素直に言えないのが、この年齢の子どもであることをわかってあげてください。

ところが、ここに難しい点があります。

「何でも聴いてあげてください」と言っても、無遠慮に、心の中にどかどかと入り